

ツリガチ!

TSURI
GACHI



★なんでも釣れガチ!

それがSLJ——スーパーライトジギングの魅力だ。

12月15日、外房は大原・広布号からのSLJは多彩な魚種が釣れ盛り、SLJらしい半日となった。

そして最後には劇的なドラマが——!

夢とロマンも、SLJの魅力なのだ。

外房大原冬のSLJ

文◎高橋 剛



▲当日は片舷に並びドテラ流して探っていた

本格的な青物ジギングは棍棒のようなロッドに、スピニングリールはシマノ80000〜100000番台の大型。PE4号、リーダー16号の太糸を使い、ジグは150グラム前後。全体的にガツシリズシン

「ドラグがビヤーツと出て、どうにも止まらなかつたです。あれはスゴかった!」
大原港を離れた広布号が、外房の新しい海を進んでいる。
「先日この船のスーパーライトジギングで、ヒラマサのデカイのを掛けたんです」というお客さんの話に、みんなが耳を傾けていた。
まるで囲炉裏端で酒を酌み交わしながらの釣り談義のようだ。話を聞いている全員が同じように、ヒラマサの強烈な引きをイメージし、その手にリアルな重みを感じている。
妄想のヒラマサを軸にした、釣り人ならではの一体感。大物の話は、いつだって釣りの距離を近づける。
野島幸一船長が懸命に船を回して追いかけた。だがヒラマサはラインをブチ切り、悠々と逃げてしまったそうだ。
「そうなんですかあ……」

「マジかあ……」
ため息が出る。
「でも、夢があるよね」
「ロマンだよ」
話を聞いた人たちは、一緒に期待に満ちた笑顔だ。そして自分のタックルを思い浮かべながら「アレにそんなデカイのが掛かっちゃったらどうしよう……」

大原のSLJは気軽に楽しく、緊張感と期待感もある。

と、勝手にビビる。
「竿は根元までひん曲がるだろうな……」「ラインシステムはちゃんと耐えられるかな……」
広大な外房の海には、確かにロマンがある。ワクワクがある。たくさんの釣り人と大きな夢を乗せた広布号は、静かに太東沖のポイントを目指す。
外房の青物ジギングは、ヒラマサがメインターゲット。端から15キロ、20キロのモンスターを狙う釣りだから、タックルもゴツくなるのだ。
一方のSLJは「その場、そのときに釣れる魚」がターゲット。青物根魚なんでもござれのフリーダムさだ。ジグがコンパクトな分、大小取り交ぜ様ざまな魚が食ってくる。
ただし、「大小」のうち「大」がハンパない。10月には船長、そして船長の愛息にして小学6年生スーパーアングラー・大威翔くんが、そろって14キロ級のヒラマサを上げていた。
PEは08号が多用されるSLJだが、広布号では12号を推奨しているのは、こういうド級が